

大学入学共通テスト英語リスニング問題の分析

著者	渡辺 英雄
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	11
ページ	63-69
発行年	2021-10-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001601/

大学入学共通テスト英語リスニング問題の分析

An Analysis of the Listening Section of the Common Test for University Admissions

渡 辺 英 雄^{*}
WATANABE Hideo

1. 研究の背景

2021 年度より大学入学共通テストが導入され外国語（英語）ではリスニング問題の配点が 100 点と英語試験問題配点の半分以上を占めるようになった。大学入学共通テストでリスニングの配点が高くなった要因は、2003 年に発表された『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』（文部科学省、2003）まで遡る。この行動計画の一つにリスニングテストを大学入試センター試験に導入することが含まれていた。そして 2006 年度の大学入試センター試験からリスニングテストが導入された。その後更なる英語教育改革が「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」（文部科学省、2011）と「グローバル化に対応した英語教育改革の 5 つの提言」（文部科学省、2014）の中で提言された。それらの提言では大学入学センター試験から大学入学共通テストへの変更、英語の 4 技能を測る民間試験を受験することが定められた。しかし英語民間試験の結果を大学入学共通テストの中の大学入試英語成績提供システムとして使用することは延期された。それに代わり大学入学共通テストではリスニングの配点を英語全体の 5 割まで増やすこととなった。大学入学共通テスト導入前は大学センター試験外国語（英語）テストのリスニングの配点が 2 割であったことを考えると大きな変化である。大学への進学希望者の多くが受験するテストにおけるこのよう大きな変化は中等教育の学校や学校外での学習に影響を与えることが考えられる。このことから大学入学共通テスト英語リスニングテストの内容を分析することで、その分析結果を英語教育、英語学習に応用することは日本の英語教育に寄与すると言えよう。本研究では語用論や機能文法の中で発達した言葉の働きに焦点をあてて研究を行った。

2. 先行研究

大学入学共通テスト英語リスニング問題に関連した先行研究として大学入試共通テストのリス

* 武蔵野大学教育学部

ニング問題の研究、他の英語テスト（TOEIC、IELTS、TOEFL など）のリスニング問題の研究が挙げられる。はじめに前者の日本の大学入学に関わるリスニング問題に関連する先行研究について議論を進めることとする。日本の英語学習の環境では英語学習は主に様々なテストのために英語の学習を行うことが広く認識されている（静, 2002）。日本におけるテストの中で一番影響力を持つテストの一つである大学入学に関わるテストは波及効果という視点から研究されてきた。大学入試センター試験のリスニングでは、リスニング問題が導入されたことでリスニングの学習時間や学習意欲が増したが、リスニングの点数を大学入学センター試験のリスニング問題導入前後と比べても有意な差は見られなかったことが報告されている（Hirai, Fujita, Ito, & O'ki, 2013）。つまり、ただリスニング問題を導入しても学習者のリスニング力の向上という点では望ましい波及効果は見られない。そのためリスニングテスト導入とそのための指導をあわせて行う必要があると考えられる。例えば馬場（2019）は言語テストにより望ましい波及効果を持たせるためには指導者が学習者の学習に対する信念を変えることを挙げている。

ここではリスニングテストが導入された大学入学センター試験のリスニングテストに関わる選考研究を紹介する。長谷川（2007）は大学入学センター試験のリスニング問題で使用された単語の使用頻度を分類した。最も頻繁に使われる 1000 語を Level 1、2 番目に最も頻繁に使われる 1000 語を Level 2、その次に頻繁に使われる 800 語を Level 3 としてそれ以外の単語をレベル外の単語とした。分析の結果、中学校、高等学校で扱われる単語の Level 3 までの単語が 94% を占めた。この研究では大学入試センター試験では難易度が高い低頻出の単語を聞き取る学習をするのではなく、検定教科書で扱われている単語を聞き取ることの重要性が示されている。長谷川（2006）では大学入学センター試験をセンテンス数と各単語のシラブル数が調査された。センテンス数は一つの問題につき 2 ～ 11 つであり、ほとんどの単語が 2 シラブル以下の単語であった。このことから大学入学センター試験では 3 シラブル以上の難解な単語はあまり使用されていないとの結論に至った。この二つの先行研究はセンター試験のリスニング問題の研究において有用な結果を示しているが研究対象が語彙の意味やセンテンスの数など言葉の機能や文章の種類に関しては明らかにできていない。言葉の働きや文章の種類という観点からリスニング問題を分析した場合、リスニング問題についてさらなる洞察が可能であると考えられる。

3. 研究課題及び方法

本研究では大学入学共通テストの英語リスニング問題を言葉の機能、文章の種類という観点から分析を行い、受験者がどのような種類の言葉の機能や文章の種類について英語におけるリスニング力を問われているかを明らかにする。そして分析結果から英語教育への応用を提案することによって本研究の狙いがある。本研究では言語行為、レジスター、ジャンルという応用言語学の中で発達した理論を分析的な枠組みとして 2021 年 1 月 16 日実施の英語リスニング問題（大学入試センター, 2021）の分析を行う。ここではリスニング問題と分析的な枠組みを示す。

大学入学共通テストは 6 つの大問があり、その中で複数の問題が設定されている。解答方法は選択肢から選ぶ形式である。それぞれの問がどのような内容かは表 1 に示す。

表1 大学入学共通テスト内容

問題番号	問題数	問題内容	配点
第1問A	4問	英語を聞いて、その内容に一番近い答えを選ぶ。	16点
第1問B	3問	英語を聞いて、その内容に一番近いイラストを選ぶ。	9点
第2問	4問	対話を聞いて内容に関する質問の答えを選ぶ。	16点
第3問	6問	対話を聞いて内容に関する質問の答えを選ぶ。	18点
第4問A	8問	表を用いた説明を聞いて選択肢から表の空欄にあてはまる答えを選ぶ。	8点
第4問B	1問	英語の説明を聞き、示された条件に照らし合わせて答えを選ぶ。	4点
第5問	7問	英語の説明を聞き、内容についての問題に適切な答えを選ぶ	15点
第6問A	2問	対話を聞いて内容に関する問題への答えを選ぶ。	6点
第6問B	2問	対話を聞いて内容に関する問題への答えを選ぶ。	8点

次にリスニングの問題分析を行う言語行為、レジスター、ジャンルという3つの分析的な枠組みについて示す。語用論の中で発達した言語行為では、人間の発話は文字通りの意味ではなくその言葉を見たり聞いたりした人へ何らかの働きかけを行う行為であると考えられる（Austin, 1962）。例えば「この部屋寒いね」と言えば文字通り室内の温度について話すことだけでなく「エアコンを消して」という働きかけを行っているとも取れる。このように言語行為では言葉の働きに焦点をあてて言葉を分析する。二つ目の分析的な枠組みであるレジスターは Halliday が主に発達させた機能文法の理論である。機能文法では言葉は必ずある文化的及び状況的な背景に基づいて意味が決定されると考える（Halliday & Matthiessen, 2014）。また言語使用者は文化的及び状況的背景から適切な言語使用を行っているとも考えられている。レジスターは Halliday の理論の状況的な背景にあたる。状況的な背景は活動領域(field)、役割関係(tenor)、伝達様式(mode)によって構成されている。活動領域とはどのような話題であるか、専門的なことなのか、それとも日常なことなのかを意味する。役割関係はどのような人間関係で言語が使用されているのか、感情がどこまで共有されているかを指す。最後に伝達様式は対面なのか、書面なのかなどどのようにコミュニケーションが行われているかを言う。これらの状況的背景を作る要素が言語使用、そして言葉の意味を決定付けている。三つ目の分析的な枠組みはジャンルという文章の種類に関わるものである。ジャンルもレジスター同様に機能文法の中で発達した。Martin(2016)はジャンルを「目的」があり、「段階」を踏んで行う「社会的」な活動と定義している。Humphrey et al. (2012) はジャンルの具体例として「物語文」、「反応文」、「手順文」、「振り返り文」、「描写文」、「説明文」、「説得文」を挙げている。上記の三つの分析的な枠組みを用いて分析を行った。

4. 結果

言語行為

第1問A、Bは短いモノログであるため言語行為での分析が適切であった。第1問A、Bでは様々な言語行為が使用されていることがわかった。7つの問の中で要求、説明、質問、提案、主張、描写の6種類の言語行為が使用されていた。質問という言語形式でありながら要求（例「Can I

have some more juice?」) や提案 (「How about Sunset Beach?」) のような言語行為がみられた。

レジスター

第 2 問から 6 問まではレジスターの分析的な枠組みで分析が行われた。活動領域では日常的な事柄について話されている問題が多くを占めた。ただ話題は多岐にわたり水筒、食糧品、掃除用具など具体的な物質を表すことから会議、日程、休日の過ごし方などの比較的抽象的な事柄まで扱われていた。ただ第 5、6 問では活動領域は専門的になり、幸福、言語学習、環境問題についての英語を適切に聞き取る必要がある。役割関係ではリスニングの対話は友人、家族、職場の同僚などの平等かつ親しい関係であることが多いことがわかった。ただ平等な関係で親しい関係性の中でよくみられる感情や評価を表す表現はあまりみられなかった。伝達様式は多くが対面で即座の返答がある形式であった。対話の場合は全てが対面の形式であり、オンラインや電話での対話は見られなかった。

ジャンル

第 4 問、第 5 問はジャンルの観点から分析を行った。分析を行った英語の全てが描写文に当てはまる結果となった。描写文は何かに関する数値や特徴の情報を伝えることをする文章の種類である。説明文は因果関係を表すため描写文と異なる。また説得文ではある意見を主張することを目的とするため描写文とは異なる。

5. 結果の考察

本研究の目的は大学入学共通テストの英語リスニング問題においてどのような言葉の働きや英文の種類が使用されているか明らかにすることにある。

分析結果から大学入学共通テストは高等学校で学習すべき内容を反映していることにある。2009 年文部科学省告示の現行学習指導要領ではリスニングに関して「事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする」(p. 11) として、話題に関しては「日常生活に関する身近な話題を含め、様々な話題についての会話を指す」(p. 11) としている。本研究での分析結果から日常的な話題は多く占めながらも様々な事柄についての対話やモノログが使用されていた。また幸福や環境問題などの社会的な話題も問題には含まれていた。ただし、レジスター分析で行った活動領域では様々な話題が話されていることがわかったが役割関係では親しく、平等な関係であることが多くより様々な役割関係を設定することでより日常的话题でも言語的な多様性が出ると考えられる。また親しく平等な関係ではありながら感情や評価を表す表現が少なく英語の真正性を下げていた。ジャンルの観点から議論すれば描写文という種類のみが使用されていた。描写文は事実を数値や特徴から伝える文章の種類であるが議論文などある事柄について複数の意見が提示される文章の種類もリスニング問題としては適切だと考える。このようなレジスター及びジャンルの多様性は大学入学共通テストのような影響力の大きいテストでは重要である。Chou (2021) は大学入学試験での英語リスニング導入は学習者の学習方法を変化させる波及効果があり、Yildirim (2010) は教員側の指導への良い波及効果が見られたとしている。そのためリスニング問題でのレジスターやジャンルの多様性は英語リスニング

の学習や指導への影響を大きく持つと認識できる。

6. 英語教育への応用

ここでは本研究の結果を英語教育へ応用する方法を示す。

クラスルームイングリッシュへの応用

大学入学共通テストのリスニングでは言語行為の面で様々な種類が見られた。学習者が様々な言語行為を理解できるようになるためには英語教員が授業内で様々な言語行為を使用すると効果的であると考えられる。クラスルームイングリッシュでは学習内容の導入や言語活動の指示だけでなく、「依頼」や「主張」など様々な言語行為を教員が使用することにより学習者が英語での言葉の働きを理解できるようになるであろう。

教材選択への応用

指導者や学習者はリスニング教材を選ぶ際、言語行為、レジスター、ジャンルの要素を考慮して選ぶと大学入学共通テストに向けて適切な英語リスニング学習資料を選ぶことができる。分析結果からわかるように大学入学共通テストでは日常的な話題の対話型の英語が多い。そのような英語を聞き取れるように指導・学習できることが大事である。またモノログの英語では社会的な話題について聞き取る問題があるため社会的な話題に関連する英語の知識を増やし、社会的な話題についてリスニングを行う能力を養えるような学習資料を選ぶべきである。現在は市販されているものだけでなく、TED や BBC Sounds のように無料でオンライン上に公開されているものも多いため、様々な方法でリスニングの学習することができる。

リスニング指導への応用

大学入学共通テストでは日常的な話題が多く、語彙や文法的な難易度は高くないと考える。また聞いた英語と背景知識などを用いて英語の概要を理解するトップダウン的なプロセスが重視されている。これは問題形式から個々の単語などではなく英語の概要を理解できているかを測っているためこのようなプロセスの能力を主に測っていることが考えられる。Rost (2016) はリスニング指導の最終目標はトップダウン的なプロセスを行わせることにあるとしている。しかし、トップダウン的なプロセスを補うためには音素や単語から意味を理解しようとするボトムアップ的なプロセスの学習も必要である。そのためリスニングの学習段階ではトップダウン的なプロセスを練習すると同時にディクテーションなどの活動を行い、学習者がボトムアップ的なプロセスを行えるようにすべきである。

7. 結論

大学入学共通テストでは言語行為と活動領域で多様性が見られた。ただし、役割関係やジャンルという面では幅が狭く、このような面より多様性のある英語リスニングが学習や指導への良い波及効果を生むと考えられる。レジスターの中の伝達様式では対話形式が多くみられて、日常的话题から社会的な話題まで幅広く扱われていた。これは学習指導要領で定められた高等学校

での学習に関連が強かった。リスニングテスト導入だけでは受験者のリスニングテスト向上という面での波及効果はないことが前述のとおり報告されている。そのため本研究の結果から英語リスニングの指導及び学習へ応用されることが望ましい。

参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Oxford university press.
- Chou, M. H. (2021). The impact of the English listening test in the high-stakes national entrance examination on junior high school students and teachers. *International Journal of Listening*, 35(1), 53-71.
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Hirai, A., Fujita, R., Ito, M., & O'ki, T. (2013). Washback of the Center Listening Test on learners' listening skills and attitudes. *ARELE*, 24, 31-45.
- Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. (2013). *Halliday's introduction to functional grammar* (4th Ed.). New York: Routledge.
- Humphrey, S., Droga, L., & Feez, S. (2012). *Grammar and meaning*. Sydney: PETAA.
- Martin, J. R. (2016). One of three traditions: Genre, functional linguistics and the "Sydney School". In N. Artemeva & A. Feedman (Eds.), *Genre studies around the globe: Beyond the three traditions*. (pp. 31-79). Bloomington, IN: Trafford Publishing.
- Rost, M. (2016). *Teaching and researching Listening*. New York: Routledge.
- Yildirim, O. (2010). Washback effects of a high-stakes university entrance exam: Effects of the English section of the university entrance exam on future English language teachers in Turkey. *The Asian EFL Journal Quarterly*, 12(2), 92-116.
- 静哲人. (2002). 英語テスト作成の達人マニュアル. 大修館書店.
- 大学入試センター. (2021). 大学入学共通テスト Retrieved from https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka/pre-test_h30_1110.html
- 長谷川由美. (2006). 日韓のリスニングテストの比較 リスニングパッセージにおける使用単語, 文, シラブルの計量的分析を中心に. 25-44.
- 長谷川由美. (2007). 韓国修能試験と日本センターテストのリスニングにおける語彙の比較—Frequency Level, 品詞, 意味, 機能という観点から—. *アジア英語研究*, 9, 39-55.
- 文部科学省. (2003). 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/1300465_02.pdf
- 文部科学省. (2009). 高等学校学習指導要領解説外国語編

- 文部科学省 . (2011). 「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」について . Retrieved from
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf
- 文部科学省 . (2014). 今後の英語教育の改善・充実方策について報告—グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言—. Retrieved from
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm